

位置と環境

遺跡は国道10号線沿いの東九州自動車道財部・末吉インターチェンジ付近の、今別府川右岸の標高290mの台地上に立地している。10号線の向かい側には、桐木遺跡が所在する。

調査の経緯

東九州自動車道の建設に伴い、県教育委員会が調査主体となり、平成9年度に確認調査、平成11年度から平成12年度にかけて本調査を実施した。

調査面積は、5,410m²を対象とした。

遺構と遺物

平成11年度と平成12年度の調査は、旧石器時代ナイフ形石器文化期・細石刃文化期、縄文時代草創期・早期・中期・晩期、古墳時代～古代にかけての複合遺跡で、遺構や遺物が多量に発見された。

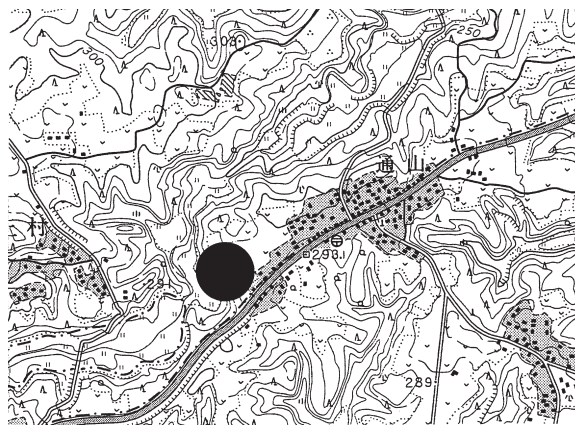
特に、旧石器時代の細石刃文化期は2時期、ナイフ形石器文化期についても2時期の文化が確認でき、この時期の解明に大きな資料提供となった。

1 細石刃文化期の遺構・遺物

本文化期は、XⅠ層とXⅡ層より出土し、XⅠ層とXⅡ層では細石器を作り出すときの技術が違うこと、出土地点がずれることより、2時期の存在を確認した。また、XⅡ層では、小さい礫群1基を検出したが、礫数5個で構成されている。

2 ナイフ形石器文化期（台形石器）の遺構・遺物

ナイフ形石器文化期は終末期に当たる時期で、小型の台形石器（第3図1～3）がXⅢ層より大量に出土した。台形石器は、1～1.5cm位の大きさで、単体で使用するには小さすぎるものである。また、二側縁加工の小型ナイフ形石器（第3図4～7）も出土しているが、数は多くない。また、XⅢ層の遺物は、遺跡南側では環状に出土した（径約20m）。このような事例は数例が報告されているが、本遺跡以外の遺跡では全てAⅢの下から発見されており、AⅢより上では初めての発見である。遺構は、礫数7個の礫群1基が検出されている。



第1図 耳取遺跡の位置

3 ナイフ形石器文化期（剥片尖頭器）の遺構・遺物

本文化期の遺物は、XⅥ層・XⅦ層から剥片尖頭器（写真1）が出土した。XⅦ層の炭化物の¹⁴C年代測定による科学分析では、約24,000年という年代が測定された。剥片尖頭器のほかにもスクレイパーも数点が出土している。

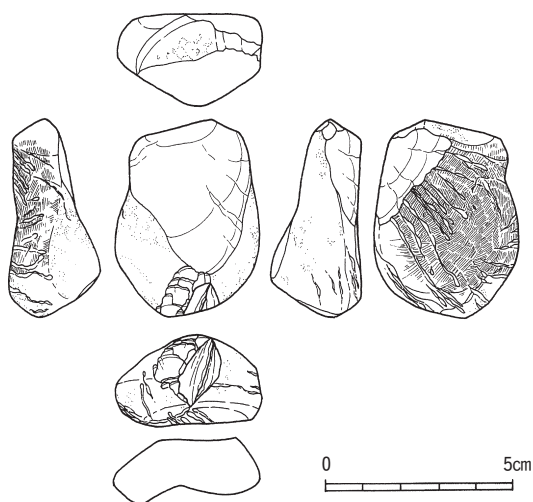
XⅥ層・XⅦ層では、約90基の礫群が検出された（第4図）。礫群には多くの炭化物が伴い、火を使った痕跡は明確である。礫群の大きさは、径・深さともに30～40cmの土坑内に拳大の礫が15～50個くらい入っており（写真2）、中の礫を抜き取った土坑（写真5）も検出された。礫群は、隣の桐木遺跡や福山町の前原和田遺跡でも検出されているが、礫を抜き取った後の土坑までは検出されていない。

線刻礫

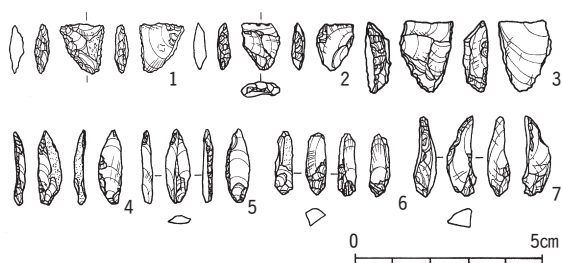
XⅦ層の53号礫群の近くでは、人工的に線を刻んだ線刻礫（写真3）が出土した。周辺に礫が多くある中で、この礫だけが異彩を放っていた。線刻礫の大きさは、長さ5.2cm、幅3.9cmの卵大の大きさで、シルト質頁岩を用いており、形状から女性を表現した石像（ヴィーナス）と考えられる。盛り上がった部分が腹部で、その下部には女性器とみられるV字状の刻みがある。背面には17条の線が刻まれ、毛髪か衣類を表現していると思われる（第2図）。日本最古の女性像（ヴィーナ像）と想定されている。

特徴

本遺跡は、縄文時代の遺構・遺物や旧石器時代の遺構・遺物ともに特筆すべきものが多く、特に旧石器時代の人々の生活様式を知る上で、非常に重要な役



第2図 耳取ヴィーナス



第3図 X III層石器実測図

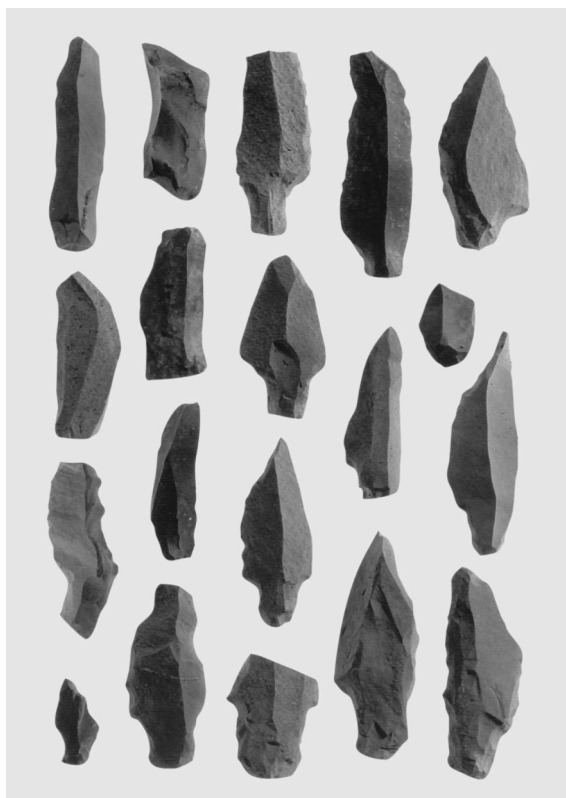


写真1 X VI・X VII層剥片尖頭器

割を果たすものと思われる。耳取ヴィーナス一つをとっても、旧石器人の精神生活をかいま見る貴重な資料である。

資料の所在

出土遺物及び礫群の一部は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「耳取遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』91

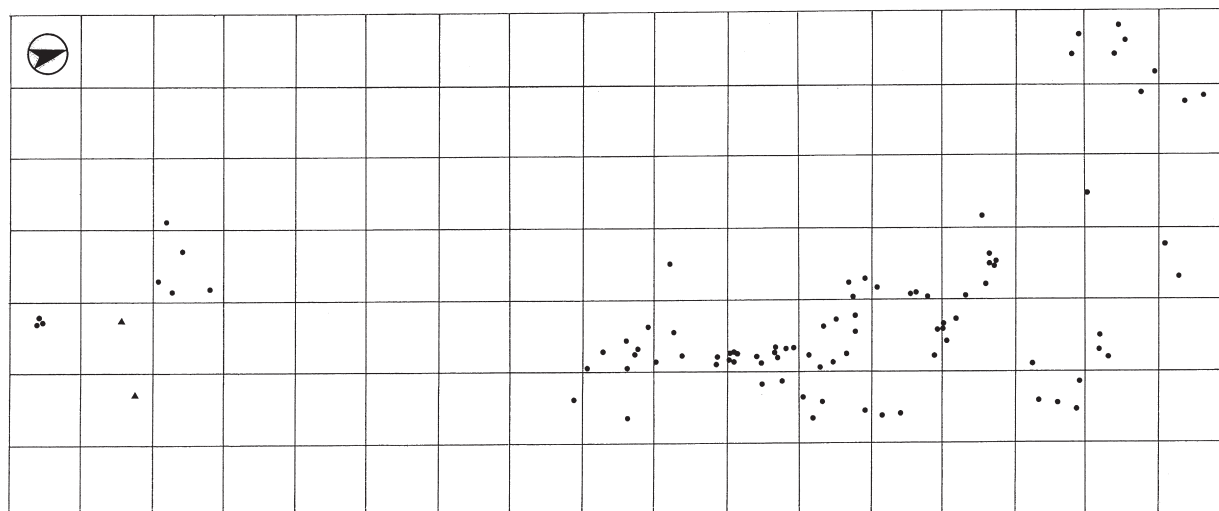
(大保秀樹)



写真2 X VII層 礫群31～33号



写真3 耳取りヴィーナス



第4図 X VI・X VII層礫群配置図



写真4 X III層遺物出土状況（環状に遺物が出土）

写真5
X VII層礫群

後方の2基は小さめの礫を10個位残し廃棄していた。

